入選

## 余計なお世話

神奈川県　西中学校
３年　川﨑めぐみ

私は、友達との帰り道に１人で歩いているおじいさんを見た。疲れているようで、座って休憩をしていた。そのおじいさんの前を通ると、おじいさんは立ち上がって声をかけてきた。友達は気にかけていなかったが、私には、おじいさんが困っているように見えたので、足を止めた。初めは、何を言っているのかうまく聞きとることができず、何度も聞き返してしまった。

その中で、おじいさんは少し離れた老人施設へ帰る途中で道に迷ってしまったようだった。しかし、私たちはその施設の場所が分からなかったため、スマートフォンで道を調べながら行った。おじいさんの分かる道は、おじいさんに聞きながら進んだ。

途中まで、別々で歩いていたけれど、おじいさんは疲れているからか、５歩歩いたら休憩をし、近くの柵につかまりながら歩いていて、辛そうだったので、私は自分の腕をつかんでもらうことにした。近くを歩くことで、会話をしながら進むことができた。冬だったこともあり、とても寒そうにしていたので、自分の上着を貸そうかと思い、おじいさんに尋ねた。

すると、「着たい」と言ったため、着てもらうことにした。おじいさんは、足が悪いように見えたので、段差は避けるように進んで休み休み歩いた。おじいさんは、私たちに度々「ごめんね、ありがとう。」と申し訳なさそう表情で言っていた。

しかし私は、人のために何かをするのが好きなので、“やってあげる”という気持ちはまったく無く、「大丈夫ですよ。」と笑いながら返事をした。途中で、「道が分かるので、もう大丈夫ですよ。」と言われ、おじいさんから離れ帰ろうとしたが、周りも暗くなり車通りも多かったため、私たちは心配になり、おじいさんといっしょに目的地まで行くこと決めた。

おじいさんが目指していた老人施設に着いた。足元も気になり、玄関まで送った。おじいさんは「ありがとう。」と言い、入っていったが、施設の方が出て来て「あ、どうも。」とあっさりとした対応をされたため、私たちはお手伝いしない方が良かったかも、と不安になってしまった。

自分の帰りが遅くなってしまったこともあり、介護職をしている母に今日あったことを話した。すると、「玄関まで行って、引き渡すまでしてくれたの。職員の方はとてもありがたいと感じたと思うよ。おじいさんも、２人に見守ってもらってすごく安心したんじゃないかな。」と言われ、不安は無くなった。

人に対して何かするときは、余計なお世話じゃないか、間違っていたらどうしようかと考えることもあるが、今回の経験を通して間違えているかどうかは、そのときにならないと分からない。もし、自分にできることがあれば、周りの人の役に立てるようなお手伝いをこれからもしていこうと考えた。